

C・S・ルイスの物語詩「名のなき島」一考察

川 崎 佳代子

C・S・ルイスは『囚われの魂』と『ダイマー』の後、短い物語詩を3篇書いた。そのうちの一つは「ランスロット」で、「ブリテンもの」といわれる「アーサー王伝説」を題材にいろいろ詩を書いていたうちの一つと思われるが、これは未完である。「ドラムの王妃」は妖精の国にあこがれる王妃がついに煩わしい現世から逃避していくくどりが描かれており、ルイスの精神的な遍歴がかいま見られる物語詩である。「名のなき島」は1930年8月と、ルイス自身のノートに記されており、タイトルは後に編者のウォルター・フーパーがつけたものである。純粹なファンタジー詩であり、明らかにモーツアルトの『魔笛』を下敷きにしている。友人アーサー・グリーヴズ宛の手紙でモーツアルトの『魔笛』に大きな関心のあることを告げている(1916年11月8日付けグリーヴズへの手紙)。友がそのオペラを観賞するというので大変うらやましがっている書簡もある(1916年11月15日付けグリーヴズへ手紙)。また、1922年10月1日付けの日記には、『魔笛』における夜の女王とザラストロとの対立が神話的な設定で、いつかそのテーマで詩を書きたい旨記している。同年10月9日の日記には、ゲーテが『魔笛』の続編を書いたという記載をモーツアルト関連の本で読んだこと、『魔笛』が自分の頭から離れないことを記している。

「名のなき島」は、若い商船長の乗る船が難破するところから始まる。一人見知らぬ島に打ち上げられ、そこで島の女王という女性から娘の救出を頼まれる。娘を拉致したのは彼女の夫で、魔法使いである。魔法使いは娘と魔法の笛を奪い、娘を石に変えようとしているという。このようなプロットを持つルイスの物語詩「名のなき島」は『魔笛』のプロットと似ている。一方、船の座礁、敵対関係にある人物との葛藤と和解、若者の愛の成就などファンタジックな設定は、シェイ

クスピアの『テンベスト』とも通じる。とはいえ、『テンベスト』のような壮大な物語と言うわけでもなく、『魔笛』にあるような思想的な含みもとくにみられない。

キング(Don W. King)は『詩人C・S・ルイス』の中で、「名のなき島」は頭韻詩としては巧みな詩ではあるが、内容的には不満足であると述べている。その理由として、読者が抱くいくつかの疑問に詩が答えていない点、および、登場人物の造型がフラットすぎて、詩のなかの出来事に読者が感情移入できないということを挙げている。本稿では、詩の構成と内容をたどりながら、「名のなき島」がどのような詩であるのか検討してみることにする。

まず簡単に『魔笛』のプロットみてみよう。ザラストロと夜の女王が対立する世界がある。女王は娘パミーナがザラストロに誘拐されたとタミーノに語り、娘を救出に行くよう彼に命じる。パミーナを母親の王国へ首尾よく連れ戻したら、タミーノはパミーナと結ばれる。タミーノとパミーナが結ばれるまでにさまざまな試練があり、それを無事に通過することでふたりは成長していく。この中で数々の通過儀礼のようなプロセスが描かれており、フリー・メイソンの秘儀を下敷きにしているのであろうとの見方がされている。

次に「名のなき島」の構成と内容を検討する。

「ドラムの王妃」のように章立てはないが、内容から大きく4つに分けることができる。全体が742行で、1～226行目までが一つの節目である。次に227～373行、374～593行、4つめが594行目から最後までである。

詩の語り手は小さな船の商船長(master mariner)。年齢的な描写はないが、詩から受ける感じでは若い。乗組員は18名。4月に故郷へ向けて船出をした。最初の10日間は快調である。

・ ・ ・ then gleaming white

Of cloud-castles was unclosed, and the blue

Of bottomless heav'n, over the blowing waves

Blessed us returning (10～13)

(・・・白く光る／雲の城が姿を見せ、底知れぬ／空の青さが風を受けた波
の上で／帰りを急ぐわれらを祝福した。)

12～13行目にかけてbを頭に持つてくることによって、小さな船が大海原を疾走する様子が元気良く描かれている。しかし、10日目から「ツギが落ちて」嵐の海に小舟が翻弄される。

Darkness came dripping and the deafening storm

Upon wild waters, wet days and long,

Carried us, caverned clouds immeasurable

Harried and hunted like a hare that ship

Too many days. Men were weary. (19～23)

(闇がしたたるように降り、荒れ狂う海に／耳を聳するばかりの嵐が何日も
続き／船が流された。深い、深い、うろのような／雲が兎のように船をおそ
い／追いかけてきた。何日も何日も。水夫たちは疲れていた。)

嵐もさることながら、水夫たちがパニックを起こし、まず一人が「座礁した」と早とちりして海に飛び込んだ。やがて崖近くに行ったとき、残りの水夫たちが次々と狂ったように身を躍らせて海に飲み込まれていく。助かったのは語り手一人であった。大波が彼を文字どおり持ち上げて陸地へ運んだのである。やがて、夢か現か定かでないヴィジョンが男を包む。

川 崎 佳代子

・ ・ ・ Amidst it came,
Unearthly sweet, out of the air it seemed,
A voice singing to the vibrant string,
‘Forget the grief upon the great water,
Card and compass and the cruel rain.
Leave that labour; lilies in the green wood
Toil not, toil not. (69～75)

(・・・水音に混じって／この世のものとは思えぬ妙なる声が まるで空から降るように／つまびく琴の音に合わせ 聞こえてきた。／「海の上の悲しみや／羅針盤や指針面、冷たい雨を忘れなさい。／労苦は終わり、緑の森に咲くユリは／働かず労しない。」)

s、v、f、g、c、l、tの頭韻が調子よい。美しい女性の声が、遭難した男の心にしみ渡る。森の中にたたずむ女人の美しさに、男は身を投げ出し、ひれ伏す。このあたりは、『魔笛』1幕で、美しい夜の女王に見とれるタミーノを彷彿させよう。また、女王は彼の求愛を拒絶するが、代わりに娘の救出を依頼する。『魔笛』では、蛇に追われて気絶していたタミーノが女王の娘の肖像画を見て、王女にたちまち恋いこがれるところも似ているといえる。ルイスの描く女人は森の女王であり、魔女である。彼女は森の生き物を自らの乳で養う。

・ ・ ・ I

Saw how she suckled at her sweet fountains
The tribes that go dumb. Teeth she feared not,
Her nipple was not denied to the nosing worm.
I thought also that out of the thick foliage

I saw the branches bend towards her breast, thirsting,
Creepers climbing and the cups of flowers
Upward opening—all things that lived,
As for sap, sucking at her sweet fountains. (128~136)

(女人は物言わぬ種族にあふれる乳を飲ませた。／牙を恐れることなく／鼻をすり寄せるへびにも乳房をふくませた。／深い葉陰からのどを渴かせ／木の枝さえ彼女の胸を求めて首をかしげ／ツタがからみ花びらは／上を向いて咲く——生きとし生けるものは／生氣をもとめるように女王の甘美な泉で潤った。)

この場面はルイスのSF三部作『ペレランドラ』の緑の女人を連想させ、同時に楽園のイブのイメージにもつながる。またイザヤ書にある天国のヴィジョン、猛々しい動物も小さな動物も共生するというヴィジョンを思い出させるかもしれない。しかし、後にドワーフや彼女の夫であった魔法使いの説明をとおして読み直すと、この場面には若干の曇りが生じる。つまり、彼女は遭難したドワーフの仲間の一部を変身させた、キルケのような魔女であるからだ。とすると、この場面は、オデュセウスと動物に変身した水夫、そしてキルケの出会いの場面となる。あるいは墮落以前のイブの姿ではなく、墮落後のイブということになる。また、彼女が一人であるという点からみると、ユダヤ伝説のリリスのイメージに近いともいえる。

とはいえ、語り手はこの時点では知るよしもない。愛を打ち明けた男に、自分の囚われの娘を取り戻してくれたらその娘を妻として差し上げようと言う。魔法使いはもともと嵐のさなかに海からやって来て、助けてやったにもかかわらず、徐々に権力をのぼし、領土の半分を女王から盗み取ったという。また魔法の笛も奪い、その上娘まで連れ去った。魔法使いは娘を大理石の像に変えようとしているらしい。『魔笛』では、ザラストロは夜の女王の夫ではなく独身である。しかし、

川 崎 佳代子

魔法の笛、娘の誘拐など類似点が多い。

次に227～373行をみてみよう。明け方になり、一人になった男は、すべてが夢ではなかったのかと思いかけたが、足下には女王がくれた剣が落ちていた。剣をとり、魔術師の領地へと出かける。冒険の始まりである。

Over hedge, over ditch, over high, over low,
By waters and woods I went and ran,
And swung the sword as I swung my legs.
Laughing loudly, alone I walked,
Till many a mile was marched away. (254～259)

(垣根を越え、溝を越え、山を越え、谷を渡り／川や森を歩き、走る。／足を動かすと剣が揺れる。／声高く笑い、一人わたしは歩く。／こうして何マイルも行進していた。)

この5行は3回繰り返される。リフレインは男の心の状態を表現している。やがて、小川の縁で、金色の光る笛を見つける。吹いてみるが音が出ない。腹立たしく思い、一度は捨てるが、気を取り直して拾い、ずだ袋に入れる。キングはこの箇所主人公の単純さを不満だと述べている。女人から魔法の笛について聞かされておりながら、拾った笛をその話と結びつけようとしめない点である。たしかに詩全体をとおして、この語り手の思慮のなさは歴然としている。森の中の女人を見て、美しいからと行ってすぐさま愛を告げ、娘を救出したら結婚させてやると言われ、唯々諸々とそれに従う。女人の言ったことが果たして真実か否か疑うこともしない。かれの行動はあまりにも衝動的であるように思われる。一方、古代神話において英雄の行動パターンはおおむね単純に描かれている。ルイスが日記に記したように、神話的な詩を意図しているのであれば、語り手の心理にあま

り頓着していないのは不思議ではない。

次に語り手は笛を拾い、先述のリフレインがあり、陽気に行進を続ける。まもなくサリスベリーのストーンサークルのような場所にやってくる。そこには気高い神々にも似た石像が林立している。その中に一人ドワーフがいた。悲しみに打ちひしがれたドワーフに男が声をかけると、ドワーフが身の上を話す。難破した船の仲間が、魔法使いによって石に変えられた。仲間は石像になり、ずっと美しくはなったが、「その代償は死でした。／死でもって美を買ったのです」(338～9)と嘆く。そこで語り手は西の森に住む女王の使命を受けて魔法使いからこの国を解放しに行くところだから、そこへ案内するように頼む。ところがドワーフは「魔法使いは敵だ」と言いながら、森の女王も同様に恐ろしいというのである。

She has a wand also, that woman there;
Whom she chooses to change, she'll choke the voice
In his throat. Thickly, like a thing without sense,
Growling and grunting, grovelling four-foot
He will pad upon paws. (351～355)

(あの方も杖をもっておられる。あの女人は／姿を変えようと選んだものの、声を奪ってしまうのです。／理性のないもののように、唸り、吠え、四つんばいでは回り、／獣の足で歩くのです。・・・)

ドワーフは石になるのも、動物に変えられるのもいやだという。初めて語り手は不安を感じる。「疑いが首をもたげて、内から萎え、つきまとう恐れで心が冷え、曇ってきた。／新たにこの話を聞いたためである」(366～368)。いやがるドワーフを無理矢理せかせて魔法使いのもとへと案内させる。ここで、3回目のリフレインが挿入されるが、少し変化している。

川 崎 佳代子

垣根を越え、溝を越え、山を越え、谷を渡る

川や森を歩き 走る。

歩きながら剣を振ることもしなかった。

声高く笑うこともなく わたしは歩く。

こうして何マイルも行進した。(374～378) (原文は省略する。下線は筆者による)

このリフレインから3つ目のセクションになる。単純な男も新たな情報により、最初に聞かされたことが果たして真相なのか疑い出したのである。冒険の目標には向かっているが、心は以前ほど軽くはない。

夕暮れに近づき、花の群れの中に大理石の乙女が立っていた。時すでに遅く娘は魔法使いによって石にされてしまったのである。

・ ・ ・ Queen-like there stood

A marble maid, mild of countenance,

Her lips open, her limbs so lithe

Made for moving, that the marble death

Seemed but that moment to have swathed her round.(388～392)

(・ ・ ・ 女王の佇まいで／大理石の乙女が立っていた。優しい顔つきをし、／唇を開き、手足は生き生きとしていた。／今にも動き出しそうだったので、大理石の死は／ほんのつかの間乙女のまわりを包むだけであるかのようにだった。)

男は石像の乙女にたちまち魅了される。『魔笛』においてタミーノがパミーナの肖像画を一目見て恋するのに対応している。そこへくだんの魔法使いが登場する。

The beard upon his bos'm, burnt-gold in hue
Grew to his girdle. That was the gravest man,
Of amplest brow, and his eye steadiest,
And his mien mightiest, that I have had met in earth. (4040~407)

(あごひげは胸まで届き、赤っぱい金色に輝いて／腰ひものところまで達していた。威風堂々たる男性で／秀でた額をもち、まっすぐにこちらを見つめていた。／かれの物腰は、わたしがこの世で出会った中でもっとも威厳があった。)

若い船乗り、ドワーフ、威厳ある魔法使い、そして美しい乙女の光景は『テンペスト』を彷彿とさせる。魔法使いは語り手に、乙女を愛するなら自分も石になるよう勧める。

・・・Eager lover,
Not even the art of this old master
Can wake, as you want, this woman here.
Chaste, enchanted, till the change of the world,
In beauty she abides. Nor breath, nor death,
Touches nor troubles her. You can be turned and made
Nearer to her nature; not she to yours
Ever. (419~426)

(この老いた魔法使いの杖をもってしても そなたが望むように／この乙女を目覚めさせることはかなわぬ。／この世が変わるまで、貞淑に魔法にかかったまま／乙女は美をまとっている。生きることも死ぬことも／乙女を煩わすことはない。そなたとて 姿を変えられ／乙女と同じものになることは

川 崎 佳代子

できるのだ。 逆は／断じてない。ただそなたが変わることで／花嫁の待つところへ そなたを導くのだ。)

男は恐れながらも魔法使いの説得に次第に促されていく。しかし、石になれば石の乙女と心を通わすこともできないのではないかと、男は考えを巡らすことはしない。さらに魔法使いは言う。「外から見えるものは／すべて内側では違うものになる」(459)と。娘を石にしたわけは、「平和を恵みとして与えるため(460)」であるという。「恐れ土地で、あの子は長らく苦しんだ。／苦しみに絡み取られていたのだ」(463～4)という。しかし、石になり、五官を失い、命を失って、「平和」とは何なのかとは男は考えない。森の女王が自分のものといっていた「笛」は魔法使いが娘のために作らせたものである。『魔笛』においても夜の女王は笛の所有権を主張するが、実はザラストロのものである。神話において、「金色」しばしばは男性を象徴する。したがって「金の笛」は王の所有するものであることが普通である。魔女は娘を奪い森に逃げたが、そのとき笛を捨てたのだという。捨てた場所を誰も知らない。笛を盗んだのは、そのために苦しむ人があるという理由だけだという。魔法使いこそこの島の正統なる王であるという。森の女王は邪で、自己中心な女である。「すべて物事は内側では別の顔を見せる」(485)と再度言い、男は魔法使いの勧める飲み物を口にしようとする。

あわやというとき、ドワーフが止める。魔法使いは邪魔されたことを怒り、ドワーフを罵倒する。ドワーフのように土から作られ石になる価値もないとののしる。しかし、ドワーフは肩にかけていた船乗りの袋から笛を取り出し、吹いた。笛はまさしく「魔法」の笛であった。ドワーフが徐々に変身していく。

・・・ and from his shoulders next

Heaved by harmonies the hump away;

Then he unbanded, with a burst of beauty, his legs,

Standing straighter as the strain loudened.

I saw that the skin was smoother on his face
Than a five-year boy's. He was the fairest thing
That ever was on earth. Either shoulder
Was swept with wings; swan's down they were,
Elf-bright his eyes. (530~538)

(まず毛深さがなくなり、肩からは／背こぶがとれた。／つぎに美が爆発する
ようにぱっと足が伸び／まっすぐに立った。／赤子のような美しい肌になり、
／地上でもっとも美しい生き物となった。／両肩から翼が生え、白鳥の
柔毛のようだった。／目はエルフの輝きを放っていた。)

『魔笛』では笛は副次的な役目しかなく、あまり活躍の場がないが、ルイスの詩では笛は魔法をかけるだけでなく、魔法を解く働きもある。それも単に元の状態に復帰させるだけでなく、より美しくするのである。石像が笛の調べに乗って次々と動きだし、死の束縛を破って命に輝きだしたのである。石像がよみがえる場面は『ライオンと魔女』にも登場する。仲間は大石ではなくなったが、美しさは留まっていた。神々しい人々は泣きながらドワーフだった仲間のまわりに集まり踊り、彼を王と呼んだ。次に大理石の乙女がよみがえる。船乗りは言葉を失って呆然とその変化を見守るだけである。彼女のまわりにドワーフの仲間がやって来て踊る。船乗りは乙女の足下にぬかずく。

やがて魔法使いも夢からさめたように、

・ ・ ・ Miseries innumerable

Have ruled in this realm. I will run quickly
West to the woodland, to the wild city,
Haply my love lives yet. Long time I've borne
Hate and hungering. Now is harvest come,

川 崎 佳代子

Now is the hour striking! the ice melting,
The bond broken, and the bride waiting. (586~593)

(・・・数えられぬほどの／惨めさがこの国を支配していた。／わたしはすぐにも西に行き、森に向かおう。／まだわたしの愛するものがあるから。長らく／わたしは憎しみと欲のため縛られていたのだ。／今は収穫のとき、氷は溶け、／束縛は解け、花嫁が待つときだ。)

こうして最後のセクションに続く。

・・・Earth-breathing scents
On mildest breeze moved towards us.
Cobwebs caught us. Clear-voiced, an owl
To his kind calling clove the darkness,
The fox, further, was faint barking.
We came quickly to the country of downs
That lies so long between the land of dread
And the grim garden. Glory breaking
Unclosed the clouds. Clear and golden
Out into the open swam the orb'd splendour
Of a moon, marvellous. Magic called her.
Pale as paper, where she poured her ray
The downs lay drenched. (598~609)

(・・・大地に息づく香りが／やさしいそよ風に馥郁とただよい、／クモの巣がわれらを捉える。フクロウの鳴き声も澄みわたり／仲間に闇の訪れを呼びかける。／遠くの方で狐の聲がかすかに聞こえ／われわれは足早に丘まで

やってきた。／暗闇、恐れ of 土地と陰鬱な庭の間に横たわる丘に。／雲が割れ、栄光が輝きだし、すっきりと金色に／月が空を金色に照らし、すばらしい光景だった。魔法が／月を呼んだのだ。月が照らしたところは／紙のように青白く丘は光に満たされた。)

森からはセントールがやってくる。ドワーフの仲間で森の女人に動物にされていた人たちである。ここでも笛は魔法を解いたのではなく、より美しい生き物に変えたようである。そのような馬の一頭に森の女人が乗ってやってくる。「ユリのような胸をして、優雅に喜ばしく魔法使いの愛で輝いて」(632～3)いた。女王と魔法使いの和解が成立し、646行目から669行目までは魔法使いと女王の対話となる。それから魔法使い(ここから彼は賢人と呼ばれる)が乙女と語り手に向かって、潮も満ちて船出の時だと声をかける。そして、かつてのドワーフで、今はエルフにも、望むならばイギリスへ一緒に行くように勧める。

賢人である王の声でセントールは森から木を切り出し、若い恋人たちのために船がこしらえられる。鏡のような海にこぎ出した三人のために、昔モーゼとイスラエルの民がエジプトから故郷に帰る時に紅海に道ができたように、魔法により航路が守らるのである。

The winged boy

Held firm the helm. Ahead, far on,
Like floor unflawed, the flood, moon-bright,
Stretched forth the twinkling streets of ocean
To the rim of the world. No ripple at all
Nor foam was found, save the furrow we made,
The stir at our stern, and the strong cleaving
Of the throbbing prow. We thrust so swift,
Moved with magic, that a mighty curve

川 崎 佳代子

Upward arching from either bow
Rose, all rainbowed; as a rampart stood
Right about us. As the book tells us,
Walls of water, and a way between,
Were reared and rose at the Red Sea ford,
On either hand, when Israel came
Out of Egypt to their own country. (727~743)

(翼ある少年は／しっかりと舵を取った。ずっと先には／傷のない床のように、海が月明かりの中で／広がり、まるで煌めく海の路のようだった。路はまっすぐ世界の果てまで続いていた。さざ波一つただず、／泡さえも見えなかった。船の作る水脈が／うしろにできるだけだった。激しく舳先が揺れ、／水を分けて進んでいくのだ。魔法の力で／疾走していったので、／船首から大きな弧が虹のように現れた。／まるで城壁がそびえているようだった。かの書物にあるとおり、／両側に水の壁とその中に通る道が／紅海をわたるときに生じた。イスラエルがエジプトを出て、故郷に帰る時のようだった。)

月光に照らされて銀色の鏡のような海、後ろにできる青白い水脈、透き通るような薄い半円の水の壁。それがモーゼとイスラエル人の故郷への帰還に重なるのである。また、この最後の描写はマクドナルドの『黄金の鍵』のエンディングを連想させる。したがって三人はイギリスに向かっているとあるが、本当にそうなのだろうか、疑問を抱かせるような終わり方である。男はやはり難破したとき死んだのであって、あとは死後の世界の出来事だったのではないかと想像することも可能である。エルフの少年になってしまったドワーフを連れ、魔法使いと森の女王の娘が住む故郷とは、この世界のイギリスであり得るのだろうか。そう考えていくと、最後の場面は、『朝びらき丸 東の海へ』において、二人の子どもとリー

ピチーブが舟でアスランの国さしてこぎ出していく場面を思い出させる。目の前に水の壁がそそり立ち、虹がかかり、遠くにアスランの国が見える。あるいはまた、別のルイスの作品を連想させる。アレゴリー的な作品である『天国と地獄の離婚』の中で、主人公は灰色の町からバスで天国の入り口までやってくる。そこでさまざまな選択を目のあたりにするが、主人公はジョージ・マクドナルドに導かれ、天国を選択する。そこから本当のパラダイスが開かれる。『魔笛』や『テンペスト』のプロットと似ているのは明白だが、この詩の構図は『天国と地獄の離婚』の構図にも似ており、後のルイスの作品で展開されるヴィジョンにもつながっていくような詩である。

キングは「名のなき島」は頭韻詩としてよくまとまっているが、内容的には完成度が低いと見なしている。以上見てきたとおり、主人公の単純さ、登場人物の関連性や変身の唐突さなど、説明の足りない箇所は多い。また、『ダイマー』や『囚われの魂』に比べると詩そのものが短い。「ドラムの王妃」と比べてもかなり短い。742行では、プロットを展開させるには十分な長さではない。『魔笛』や『テンペスト』その他ルイスの作品と関連させて読まなければならないとしたら、詩として成功とは言えないだろう。

ルイスが『魔笛』からヒントを得た神話的なヴィジョンとは何であったのであろうか。ザラストロと夜の女王と関係からヒントを得たとすれば、それは男性と女性の支配をめぐる昔からの対立であるといえよう。『魔笛』ではザラストロは太陽、火、空気を表し、夜の女王は、月、水、大地を表すという。夜の女王の娘をめぐる対立は強い男性の至上権をめぐる戦いを象徴しているという。ルイスの「名のなき島」でも西の森の女王と東の魔法使いである王が、娘と笛をめぐって対立している。魔女は自分こそこの国の支配者だと主張し、魔法使いは正当なる島の王は自分だと言う。ここでも森の女王は、男性の至上権に反抗するシンボルのような立場である。ユダヤの神話に登場するリリスは、アダムの子として選ばれながら、男性優位に我慢できない女性である。一方この詩において彼女は自然

と同化し、魔法使いは永遠の美をとらえるために命を石に凍結させる。したがって、ルイスの詩では、女性は自然を代表し、男性は永遠性あるいは芸術を意味している。「彼は心が冷たく／この豊かな国を荒地としているのです。／森を伐り、獣を追い出し／変化に富む多くの川を魔法で縛り」(173～177)つけていると魔女は彼のことを話す。野生の自然を人工の美に変えていく魔法使いを「あの王にとって命はうとましく、喜びは厭わしい」と女王は評している。ルイスはこうした、対立する二項を神話的と見たのではないだろうか。詩は魔法使いと魔女の和解で終わり、二人の若い男女が結ばれる。土から生まれたとされるドワーフが魔法の笛でエルフに変身し、対立するものは昇華されていくのである。

ルイスは創作過程の説明として、すべて物語は絵からはじまると述べている。「名のなき島」もおそらくイメージと『魔笛』のインスピレーションがもとになっていると考えられる。断片的なイメージがまとまらないとき、隙間を意識的に埋めていくともルイスは言っている。この詩はイメージからイメージへと飛躍がところどころある。特に最後のイスラエルと紅海の箇所は唐突な感じが否めない。ルイスは“The Alliterative Metre”において頭韻詩の良さを取り上げ、Campionの“The Planets”という頭韻詩を紹介している。しかしルイス自身も「名のなき島」のような頭韻詩を作っていたのである。神話的な題材をもつこの詩はルイスにとって、頭韻詩をつくる格好の題材に思えたのかも知れない。

いずれにしろ、詩そのものとしては、キングが批評しているとおり成功しているとは言い難く、習作に留まるものかも知れない。しかし、ルイスのイメージの連鎖や方向を知る上で興味深い小品ではある。上述したとおり、詩の中のいくつかのイメージが、のちに散文の物語にあちこち用いられることになるのも、ルイスが完成させ得なかった作品にしばしば見られる現象である。また、散文の作品の方が必ず成功するというのは、ルイスの詩人としての資質の限界を示しているように。

C・S・ルイスの物語詩「名のなき島」一考察

<引用文献>

C. S. Lewis, *Narrative Poems*, ed. by Walter Hooper (Harcourt Brace Jovanovich, NY, 1979)

参考文献

ジャック・シャイエ、『魔笛—秘教オペラ』高橋英郎、藤井康生訳（白水社、1976）。

C. S. Lewis, *They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to Arthur Greeves (1914～1963)*, by Walter Hooper (Macmillan, NY, 1979).

Lewis, *All My Road Before Me*, ed. by W. Hooper (Harcourt Brace, NY, 1992).

Don W. King, *C. S. Lewis, Poet* (The Kent State Univ. Press, Ohio, 2001).

Lewis, *Rehabilitations and Other Essays* (Oxford Univ. Press, London, 1939).

